ひよりみ

亜倉 暮亜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ひよりみ

【Ｎコード】
Ｎ２９３２Ｚ

【作者名】
亜倉　暮亜

【あらすじ】
日本の妹、桜がアジアの人たちと、ひたすらぐだぐだだらだら――一緒に雑談したりお散歩したりお茶したり歌ったり――するお話。
※もちろん桜はオリキャラです

ふゆぞら（前書き）

中国さんのターン。

ふゆぞら

最近すっかり冷え込んだというのに、菊兄は縁側に出て日向ぼっこをしていた。日向ぼっこじゃありません考え事をしてるんですとか言ってたけど、絶対嘘だ。私が時々様子を見に行くと、こっくりこっくり頭を揺らしているか、目を閉じて微動だにしないかのどちらかなんだもの。

確かに日向は暖かいけど、やっぱり空気は冷たいし、私としては部屋に引きこもりたい。

という訳で私は、ごろんと畳に寝そべって、つけっぱなしのテレビに目もくれずに携帯ゲーム機を起動させた。ポケットサイズのモンスターたちとの愉快な冒険を始める、その前に菊兄の様子を見るのは忘れていない（時々雨降っても気付かずに眠り込んでたりするから）。

障子を細く開けて見た菊兄は、いつもどおりに、膝にぽちくんを乗せてこくこく頭を振っていた。ほのぼのしていて、見ているこっちが和む光景だ。しかしまあ、こちらからそれを指摘すると怒るけど、やっぱりおじいちゃんだ（菊爺ー）。

そうして寝そべり直し、私の分身を動かし始めた時だった。

「好！桜、それはもしや噂のポケ〇ンあるか？」

縁側とは逆の襖から、Tシャツ姿の男性が現れた。

「当然のように不法侵入しないで耀兄」

「あいやー、確かに正門からは入ってないあるが、菊にはちゃんと了承をもらってるあるよ」

菊兄が？

「『ってうおおっ！こんな所に菊が！お、お邪魔するあるよ！』っ

て言ったら何回も頷いてたある」
「それうとうとしてただけだよ！」
縁側に面した庭から塀越えて入ってきたのかこの人。しかも（縁側の方の障子から入ってこなかったってことは）わざわざ玄関口を経由してこの部屋に来たとな？ていうか耀兄、うっかり余計な所まで再現してしまったらしいセリフで、不法侵入する気満々だったことが露見したんだけど。
「っていうか何の用？」
「別にないあるよ。会いたくなったから来たある」
彼女かよ！
はぁ、とため息をついて、私はゆっくり立ち上がる。色々礼儀作法のなっていないイマドキの女子高生な私だけれど、客にお茶を出す位の良識はあるのだ。
「お茶持ってくるから、そこ座ってて」
「お茶請けはりんごでいいあるよ。あ、あとうさぎにするある」
「あらゆるツッコミを省いて、っていうかむしろ包括して言うけれど、なんで！？」
卓上には既にみかんがあるというのに、その上うさぎにするという手間をかけさせるのは何故なんだ（かわいいものが好きだからですかそうですか）。なんて言いながらもりんごあったかな、と考えつつ部屋を出る私なのだった。

＊＊

「おー、こいつはかわいいあるなー」
「あんま見ないでよ、耀兄」

「なんであるか。ていうか『にーに』って呼ぶよろし」
「ポニ〇タっぽい何かができそうだから」
しかもかわいさは半減するっていうな。（呼び方の件はスルー）
携帯ゲーム機を、できるだけ耀兄から離してプレイしながら（でも止めない）、私は卓上のみかんに手を伸ばす。耀兄の手には本人の希望通りうさぎりんごがある（がんばった）。
「『にーに』って呼ぶよろし」
しぶとかった。
「嫌だよ」
「なんであるか！」
「嫌だから」
なんていうか、そもそも『にーに』呼びにあまり惹かれない。『にーに』って呼ぶ妹がかわいいとは、ちょっと思えないんだよね。そのうえ自分で呼べなんて勘弁願いたい。
なので私は耀兄が何を言おうとどこ吹く風で聞き流した。しばらくすると、耀兄も諦めたのか、再びうさぎりんごを頬張りだした。
「…しっかしまあ、寒いあるなあ」
「…そりゃTシャツ一枚じゃ寒いでしょうよ」
なんていうか、その、来た時から気になってたけど、あえて触れずにいたんだよ。だって万博とか書いてて、いかにも耀兄が好きそうな感じなんだもん！よれよれだけど、それが却って、オレは好きで着てるんだ文句言うな的な主張してたんだもん！
「別に好きでこんなかっこしてるんじゃないあるよ」
違ったらしい。
「じゃあ何…？」
とりあえず壁に掛けていた、菊兄の半纏のスペアを手渡しながら言うと、耀兄はあからさまにうんざりした表情を浮かべた。
「いや、それはまあ…ごにょごにょって感じあるよ」
ごまかすのがめちゃくちゃ下手な人だった。『ごにょごにょ』とか口ではっきり発音しちゃってるよ。

「まあ、そんなに言うなら、深く問うのは止めておくけど」
「さすが菊の妹あるな」
正確には妹ではないんだけど、日本人だからね（空気読むよー）。
「でもそれを言うなら、桜もその服は寒そうあるね。かわいいあるけど」
「これはまあ、アイデンティティみたいなもんだし」
ちなみに私の着ているのはセーラー服だ。『二次元』である私は、今も昔も架空の物語の中心にいる『少女』として存在していて、いわば永遠の女子高生なのである。だから基本装備は制服なのだ（毎日同じ服ってこと。でも定期的にデザインはリニューアルしてる）。
とはいえ、別に制服は強制なのではなくて（第一誰が強制するというのだ）、私服を着たって何も問題はないのだけど、なんか、使命感がね。
「今度ワンピース型の制服にしようかな、とか思うんだけど、どんなのがいいと思う？」
「桜はかわいいから、なんでも似合うあるよ」
その返事は根拠がないに等しいから、却って信用できないんだけどなあ。
と、そこで「そうだ」と、耀兄は手を打った。
「桜、我の膝の上に座るよろし！そしたら桜も我もぬくぬくあるよ」
「嫌だよ」
そうだ、ってなんだよ。すごく脈絡がないんだけど。なんだその我天才！って顔。
「じゃあかわいいから桜、我の膝の上で寝るよろし」
「嫌だよ！」
じゃあ、ってなんだよ！
「…しょーがねーあるなあ。譲歩して我の手のひらの上で踊るでいいあるよ」
「一気に方向性が…！？」
く、黒い…！！

でもそういう黒さをこういう所であっさり出してしまってるあたり、本当に腹黒い人ではないんだよね。腹黒いことに変わりないけど。

本当に腹黒い人というのは、耀兄の隣の国みたいな人を指す（内緒だよーでも周知の事実だよー）。

「って、もうこんな時間あるか！」

と、耀兄は自らの腕時計を見て言った直後に、最後に一つ残っていたうさぎりんごを手にした。そしてそれを頬張りながら「もうそろそろ会議あるから、行くあるよ」と立ち上がる（でも食べるんだ…）。

「じゃ、邪魔したあるな！再見！」

「うん、ばいばーい」

うん、本気で邪魔しに来ただけになってるんだけど。うさぎりんごを心行くまで食べて帰っちゃったんだけど。

結局耀兄が何がしたかったのかがさっぱり分からないまま、彼を見送った後、私はまた畳に寝そべり、みかんを片手にゲームを再開したのだった。

＊＊＊

『菊兄ー、そろそろ起きなよー』

『…はっ、な、何を言いますか、私は寝てませんよ』

『あー、ソウデシタネ』

『いつの間にこんなに暗く…冬の日は短いものですねえ』

ふゆぞら（後書き）

個人的に『にーに』と呼ぶ妹をそんなかわいいと思えない訳ですが、『にーに』って呼んで！って主張する中国さんが好きです。二次創作ではわりと定番ですよね。

こはるびより（前書き）

台湾ちゃんのターン。
人名勝手に作りました。

こはるびより

外は珍しく暖かなぽかぽか陽気だというのに、菊兄は部屋にこもってうさぎと遊んでいた。遊んでません世話をしてるんですとか言ってたけど、絶対違う。私が時々様子を見に行くと、もふもふうさぎを撫でて幸せそうにしてるか、うさぎのかわいさに悶えて微動だにしないかのどちらかなんだもの。

確かにうさぎはかわいいけど、やっぱり邪魔するのもあれだし、私としてはほっとかれてる可哀想なぽちくんを散歩させてあげたい。

という訳で私は、ぽちくんの首輪にリードを繋げて外に出た。うん、あったかい小春日和だ。雲一つ無い空を見上げて、私が爽やかな気分に浸っていると、ぽちくんがぐいぐいリードを引っ張ってくる。かーわいいなあもう。

そうしてリードを持ち直し、歩き出した時だった。

「好好〜！桜ちゃああん！」

すぐそこの曲がり角から、美少女が現れた。

「あ、おはこんにちは梅鈴（メイリン）ちゃん」

ちなみに今の時間はお昼前。なんだけどほとんど昼みたいなものだし、どっちつかずみたいな。

「奇遇だネ〜！運命だヨ〜！」

「いや、どう考えても意図的だよね」

私の背後に自宅があるからね。そこの曲がり角曲がってきたってことは、完全にうち目指してきたよね。

「ワタシたちは運命の赤い糸で結ばれてるネ！」

「それ、色んな意味でまずいよ」

「せっかくだから桜ちゃん、一緒にショッピング行こうヨ〜」

目的、それだよね。（この辺住宅街しかないし）
「あー、行きたいっちゃあ行きたいけど」
と、私はぽちくんを見やって「お散歩行かなきゃだし」と言う。
「じゃあお散歩でいいヨ」
いいのか。
まあでも、梅鈴ちゃんはショッピングに行くつもりでおしゃれしてきてるし（いつもおしゃれだけどさ）、ちょっと足をのばして一緒にお昼でも食べようかな。
私がそう提案すると、梅鈴ちゃんは嬉しそうに頷いてくれた（かわいーなー）。
そこで、ぽちくんがしびれを切らしたように、わんっと一声鳴いた。ごめんよぽちくん、もうちょっと待っておくれ。

＊＊

私と梅鈴ちゃんは、一旦自宅に戻ってきた。「ただいまー」と言いながら（またすぐ出かけるけど、一応）玄関を開けたけれど、何の返事もなかった。多分、菊兄はまだうさぎと遊んでるんだと思う。
ぽちくんを玄関先にお座りさせて、ひと撫でして、帰りが遅くなることを言いに菊兄の部屋に向かう。
そっと襖を開けて見た菊兄は、案の定うさぎに囲まれて微動だにしていなかった（あ、幸せに浸ってるんだよ）。ふにゃーっとした表情で、か、かわっ…！
「菊さああん！なにあれかわいいヨオオオ！」
「あ、うん同感だけど…」
先にそんなテンションで言われると、ね。（梅鈴ちゃん菊兄大好

きだからなー）
と、そんな梅鈴ちゃんの声でこちらに気付いた菊兄に、「ぽちくんのお散歩ついでに梅鈴ちゃんとお昼食べてくるね！」とだけ言って、私は襖を閉めた。いや、あの、後ろの人が暴走寸前なんです大変なんです。実際に暴走してしまったら、事態の収束にものすごく時間と労力が費やされることになるんです。
振り向くと、不満げな梅鈴ちゃんがいた（そんな顔なのにやっぱりかわいい。さすが美少女）。仕方なく私は、普段よりテンションを高めに、「ほらほら！お散歩にれっつらごー！」なんて言いながら彼女の背中を押し（れっつらごー…）、私たちの帰りを今か今かと待ち構えていたぽちくんを連れて出かけたのだった。
「そういえば」と、お散歩開始一歩目から口を開いたのは梅鈴ちゃんだった（はやいよ！色んな意味で！）。
「桜ちゃん、来年はどんな制服にするネ？」
これはいいところに着目してくれた。実はあのワンピースの件について、おしゃれな梅鈴ちゃんの意見を是非聞きたいと思っていたのだ。
「次はワンピース型にしようかと思ってるんだけど、どんなのがいいと思う？」
「それとってもいいアイデアネ～！桜ちゃんはかわいいから、なんでも似合うヨ！」
「それもう聞いた」
晩ご飯なんでもいいよーってのがお母さん一番困るんだよ！晩ご飯じゃないけど！万博Tシャツなんて着るような人と同じって！
「あ、そういえば」と、二度目を言ったのは、私だった。
「耀兄、あの万博Tシャツやたら気に入ってるよね」
「そうアルネ～。あれは確か老師のとこでやった万博の、限定版の記念Tシャツヨ」
「限定版なんだ…」
「こないだワタシが老師に似合いそうなTシャツ持って行った時も、

あれがいいって言って着てくれなかったヨ～」
大人気ねえ…。梅鈴ちゃんの選んだTシャツっていうんなら、おしゃれに間違いないだろうに。体も頭もかたいなああの人。
ああ、何かやわらかいものが見たい。とか思いながらふと視線を落とすと、短い足を懸命に動かすぽちくんがいた。うがああ、かわいい！（脈絡なんてない！）
「ぽちくん、君はなんてかわいいんだ！」
しかしぽちくんは私をチラ見しただけで、一切のリアクションをしてくれなかった（さっき待たされたのを根に持ってるね、君）。
…くっ、それでもかわいい君はずるい！
「とか言ってる桜ちゃんがかわいいヨ～！」
「そんな風に一生懸命主張してくる梅鈴ちゃんもかわいいよ」
「いや、もはやぽちくん含む本田一家がかわいいヨ～！」
なんだこの会話。
なんか仲の悪い主婦二人が表面上褒めあいながら、水面下では凄まじい皮肉りあいをしてるみたいな。
しかし何がすごいって、私と梅鈴ちゃんはそんなひねくれたものではなく、お互い本音を言い合っているだけであることだ。私は本気でぽちくんも梅鈴ちゃんもかわいいと思ってるし、梅鈴ちゃんも本気で私や菊兄をかわいいと思ってる。
「あ、ぽちくん、ちょっと待っててね」
そうこうしていると、目的の店に着いた。外にもテーブルがある店なので、ぽちくんだけ置いて食事、なんてことにはならない。注文をして、それを持って外に戻ってくる。
「今日はあったかいし、いい感じでしょ」
「ん～、でもうちの方があったかいヨ～」
「あー、そっか」
耀兄のとこは寒いのにね。今度うちに来るネ～！ごちそうするヨ～！と言う梅鈴ちゃんに、曖昧に相づちをうつ（だって引きこもりだからね。特に冬は。でも空気は読むよ）。

「…っていうか、そんな目で見ないでぽちくん」
さっきから気になってたんだけど、ぽちくんがすごいきらきらした目でこっち凝視してるんだよね。そんな目で見られても、残念ながら君が食べられるものじゃないんだこれは。と弁解すると、しょぼんとされた。
「そんな気を落とすこたねえヨ〜、ぽちくん」
「その慰め方なんなの梅鈴ちゃん…」
と、まあそんな風にどうでもいい感じの会話でお散歩は終始して、梅鈴ちゃんは帰っていったのだけど、ちょっとかわいそうだったかな。今度は私からショッピングに誘おう、なんて思いながら、ぽちくんに遅めのお昼ご飯をあげるのだった。

＊＊＊

『あれっ、菊兄、まだうさぎと遊んでたんだ』
『遊んでません世話をしているんです』
『ああそう。…お昼ご飯食べた？』
『えっ、もうそんな時間ですか』
『えっ、そんなに夢中になってたの』

こはるびより（後書き）

原作で日本さんがうさぎ拾いまくって大変なことになっていましたが、人にあげたりで落ち着いて、最終的に数匹いるものと考えてます。あと桜ちゃんは日本さん萌えとか思ってます。彼女はオタクです。

ゆきげしょう（前書き）

香港のターン。
人名勝手に作りました。

ゆきげしょう

外は快晴だった昨日と表情を一転した雪景色で、菊兄は居間で撮り溜めしていたアニメを見ていた。アニメ見るんで邪魔しないでくださいと、これにはさすがの菊兄も言い訳はしなかった。私がいつ様子を見に行っても、常に画面に集中するのみだものね。

確かにアニメはおもしろいけど、やっぱり基本はリアルタイムで見るし、私としては晴耕雨読（雪だけど）、読書をしながら優雅にティータイムとしたい。

という訳で私は、ティータイムのためのお茶請けを作っていた。ここで断っておくけれど、私の言ってるティータイムは、ちゃんとヨーロピアン、もっというとブリティッシュなものだ。日本人だからってティータイムと呼んで緑茶ないし抹茶とお煎餅もしくはお饅頭をいただくつもりなのではない（緑茶や抹茶も好きだけどね）。

紅茶といえばもちろん、スコーンだ。私は別に料理が下手な人でも、どこかの眉毛でもないので（これらは完全な別物です）、普通のスコーンを作るつもりだ。

しかしそこまで用意するとなると、やっぱり紅茶もおいしいものがいい。真っ先に思いついたのは、無論あの眉毛ことアーサーさんだけど…紅茶入れてほしい、だけで呼び出すと怒りそうだしなあ（怒るとこわい、というか面倒くさい）。あと万が一私のスコーンに文句付けられて、台所を占領されてしまったらどうしようどころの騒ぎじゃない。死活問題である。

「…で、俺は紅茶淹れるためだけに呼び出された的な？」

「うん、香くんだったら用事がそれだけでも怒らない気がしたから」

香くんってば『ちょっと来てくれない？あ、お茶の道具は忘れず

にね』と電話すると、二つ返事で用件を何一つ知らないまま、文句も言わずに来てくれるんだもん（いいひと！）。アーサーさんなら電話の時点でアウトだ。その場で用件を問いただされるに違いない。
香くんは私の返事に、小さくふんと鼻でため息をついて、
「…別にいいけど」
と言った。彼はそれほど表情豊かではないけれど、心は広い。優しいのだ。
さっそくやかん借りると言って湯を沸かし始めた隣で、私は香くんが来るまでの時間で焼きあがったスコーンをオーブンから出す。
「それ、何？」
「スコーンだけど…？」
「…スコーンてそんな色だったんだ的な？」
「……。」
…眉毛ぇぇぇ！
よし、何も聞かないでおこう（空気読んだよ！）。そう心に誓って、私はスコーンの盛り付け作業を始めたのだった。

＊＊

おいしい紅茶（というか、ミルクティー）とお茶菓子まで用意して、私と香くんだけでそこにいる菊兄を省くなんて、ちょっと非情じゃないか。そう思って私は、菊兄をお茶に誘いに行くことにした（ちなみに読書は中止。…あれ？本末転倒？）。
静かに襖を開けた先には、リモコンを手にしたまま画面を凝視している菊兄の後ろ姿があった。
「…菊兄、お「邪魔しないでください」あ、はいごめんなさい」

私は静かに、全力で静かに、襖を閉めた。
居間でお茶しようと思ってたけど、客間にしよう。
「香くん、お茶運んでー」
台所に戻った私はそう言って、香くんが頷いたのを確認し、盆に載せたスコーンを持って客間に向かった。
「菊さんは？」
「いいの」
「え、そこにいんのに？」
「いいの」
雪が降っているだけあって、部屋は少しひんやりしている。私は座布団を二枚、机を挟んで向かい合わせになるように置いた。ティータイムと称してスコーンと香港式ミルクティー（ごんせ、なーいちゃー？だって）を用意し、座布団に座るんだから、考えてみればすごい組み合わせである。でももともと、スコーンと紅茶を座布団に座っていただこうと考えていたのだから、大して変わりはしないだろう。
「いただきまーす」
向かいで香くんが静かに頷く。私は飲む前に、かわいい器に入った角砂糖を一つ落とす（この入れ物はあの眉…アーサーさんにもらったものだ）。そうしてゆっくりコップをもたげて、あたたかいミルクティーを口に含んだ。
「…おいしい」
と言うと、香くんは嬉しそうに微笑んで、自分もミルクティーを飲んだ（無糖で飲みよった）。
「スコーンどうぞ」
勧めながら、私もスコーンを皿に取る。蜂蜜がなかったから、代わりに持ってきた誰かにもらったメイプル（誰だっけ？）を添えた。
今回のスコーンは焼き色がすごくきれいなのだが、とにかく沢山作ってしまった。だから見た目がいいのは結構なんだけど、不味かったらどうしよう（どきどき）。

「…マジうまい的な」
「あ、これは確かに、我ながら」
どうやら杞憂だったようで、なかなか美味だった。ていうかメイプルうま。…いやしかし、スコーン自体の出来映えもいいということで、菊兄にあげるのはもちろん、香くんに手みやげとして持たせて、それから確か誰かに何かもらったと思うからそのお返しにあげて（誰だっけ？）、あとは眉毛（もう言い直さない）に送りつけてやろうと思う（香くんへの同情から来る当てつけ的な意味で）。
ちょっとした優越感に浸りながら、ミルクティーを飲む。ちょっと考えて、角砂糖をもう一つ追加した。
「ちょ、まだ入れるとか」
「だって練乳なのに甘さが控えめってのが、なんかあれで」
香くんのミルクティーに入ってるミルクというのが、無糖の練乳なんだけど、練乳ってほら、無条件に甘いイメージがあるじゃないか。
「俺は逆に甘いの嫌系」
「ああ、っぽいね。…でもいつもは少し入れるよね？」
なんで今日は入れないの？そういうニュアンスで言ってみたけど、無言で目をそらされた。…多分何言っても答えてくれないんだろうなあ。
「あ、そうだ、制服をね、ワンピース型にしようと思うんだけど、どんなのがいいかな？」
仕方ないので話を変えてみた。
それにそろそろちゃんとした答えがほしい。ワンピース型は下手したらダサいから、慎重に選びたいのだ。
「…ぶっちゃけ桜はかわいいからなんでも似合う的な」
「……。」
…いや、嬉しいんだがね？
あ、でも、普段からかわいいかわいいうるさい耀兄や梅鈴ちゃんと違って、いつも物静かな香くんに言われると、ちょっと照れるか

も。
「ていうかかなり照れる。えへへ」
「……。」
無言かい。
照れた乙女を放置するとはなにごとだ。えへへとか言っちゃった純真無垢な乙女を放置するとはなにごとだ…！こら、目をそらすな。
しかし、その後しばらくは目を合わせてくれないままだった。そこまでいくと却って不思議だ（えへへに引いたとしてもね）。なんなのこの子。
私がお茶を二回お代わりして、一息ついた頃、香くんはじゃあそろそろ帰ると言って立ち上がった。
「スコーン、ごちそうさま」
「お粗末さまでした。香くんもミルクティー、ごちそうさま」
こくり、と香くんは頷いて帰っていった。今更ながら、ああこんな雪の中、私はお茶のためだけに彼を呼び出したのだなと思う。
普通に申し訳なくなりながら、全力で静かに居間に入り、菊兄の隣へそっとスコーンを置いて、それから全力で静かに居間を出て行ったのだった。

＊＊＊

『桜、お待ちなさい』
『え、なんですかうるさかったですかごめんなさい』
『違いますよ。もう別にそこまで気にしなくていいですから、ちょっと緑茶を淹れてきてくださいな』
『緑茶っすか…』

ゆきげしょう（後書き）

香港の口調難しいです。元々そういうイメージがあったのもありますが、すごい無口キャラに…。

今回はそんなコンセプトでもなかったのに、ちょっと恋愛風味入りました。角砂糖の器が、イギリスのものであることに気付いて、ちょっと嫉妬した香港です。

かなりしつこく制服について意見を求める桜ちゃんですが、今彼女の中で最も大きな悩みなのかもしれませんね（（

よなが（前書き）

韓国でラスト。

よなが

雨はやんだけれど寒さはそのままの長い夜がはじまった頃、菊兄はお風呂に入って歌っていた。歌ってませんそれ幻聴ですとか言ってるけど、その言い訳はいくらなんでも苦しいと思う。私が時々風呂場の前を通ると、何かしらのメロディーが聞こえてくるか、私の足音に気付いてそれが唐突に止むかのどちらかなんだもの。

確かにお風呂で歌うのは気持ちいいけど、やっぱり響いて聞かれる機会が増えるのは嫌だし、私としてはむしろ菊兄が入浴中でいない今、密かに部屋で歌いたい。

という訳で私は、誰もいない居間で、つけっぱなしのテレビに目もくれず卓上に片足を乗せて（菊兄の前でこれやったら怒られる。当たり前か）エアマイクを持った。

…とその前に、歌ってる最中に菊兄に『タオル忘れたんで持ってきてください』とか言われては色々台無しなので、事前に見に行っておく。風呂場からはシャワー音と共に「い～い湯っだっな～」と聞こえてくるため、私は笑いをこらえながら（それを湯船に浸かる前の、シャワー中に歌うってどゆことー）脱衣所を覗いた。よし、今日はタオルも着替えもちゃんとある。

気を取り直して、廊下を歩く時にはもう歌を歌いはじめながら居間に戻り、そしてやっぱり片足を机に乗せる。

そもそも音が響かないからって部屋で歌っても、誰にも聞かれないでいるなんてできっこないのだとほんとは分かっていたけれど、それでも最初は、確かに防音可能な範囲で鼻歌を歌っていた。しかし、途中からもはや感情をコントロールできなくなって、もうなんか一人で熱唱しまくっていた時だった。

「かっみっさーま、あり「ウリナラマンセーっ！」ぎゃーーっ！！」
背後の襖から、青年が勢いよく入ってきた。そしてその腕は私の胸元にめがけ…
「ぎゃあああ！なにすんだあああ！わあああああ！」
私はとっさに身を翻した。そして胸を触られそうになったことと、熱唱してるとこ見られた恥ずかしさとかで叫んだ。
と、風呂場から「うるさいですよ！」と聞こえてきた。だってだって！
「桜、顔真っ赤なんだぜ！」
「うるさい勇洙！っていうか不法侵入！」
「桜の起源はオレだから不法じゃないんだぜ！」
「私の起源は菊兄だよ！」
言葉の上だけでなく、実質的に私の起源は菊兄である。とかそんなことはどうでもいい。それよりだ。ひょっとしなくても勇洙に、私の熱唱が全部聞かれたんじゃないか？（胸に関してはいつものことだからもういいよ）
「それにしても桜は歌下手なんだぜ！」
「しかも蒸し返されたーっ」
そこはスルーしようよ！私の起源がうんぬんっていうワンクッション置いたのはなんだったの！
「っていうか失礼な」
私が恥ずかしいのは部屋でひとりで熱唱していたという事実なのであって、歌が下手な訳ではないのだ。むしろキャラソンとかなら私の性質上、クオリティは高めのはずだ。
「オレの方が断然うまいんだぜ！」
「そういえば聞いたことないけど…えー」
正直上手そうには見えない。下手とは言わないけど、勢いで歌いきりそうな感じ。
「そんなに疑うならデュエットして勝負なんだぜ！」
「そんなに言うなら受けて立ってやろうじゃない！」

はっ！うっかり雰囲気で承諾してしまった！（なんか空気読んじゃった！）
でも、菊兄が出てくるまでまだ時間があるし、まだ歌い足りないからいいや。

＊＊

という訳で私たちは、誰もいない居間で、つけっぱなしのテレビに目もくれず、各々卓上に片足を乗せてエアマイクを持った。
そもそもデュエットで歌の勝負なんて、できっこないのだとほんとは分かっていたけれど、それでも最初は、確かに歌唱力の勝負をしていた。しかし、途中からもはや勝ち負けなんて関係なくなり、もうなんか二人して熱唱しまくっていた時だった。
「「じょーじょーゆーじょーまじ「お邪魔するあるよー」ひぎゃーーっ！！」」
縁側に面した方の襖から、男性が現れた。
「「うわあああ！えええええ！」」
私たちは熱唱してるとこを見られた恥ずかしさで叫んだ。っていうか勇洙も恥ずかしいんだ…。
「どどどどうしたの耀兄！」
「そそそそうですよ！」
「むしろこっちが聞きたいあるよ…」
「っていうか不法侵入だよ！」
「いや、今日はちゃんとインターホン押したあるけど、何回鳴らしても出ないあるから、仕方なく庭から入ったある」
インターホン気付かないレベルに熱唱してたのか私たち…。

「で、これ、この間借りた半纏返しにきたある。助かったあるよ。…ほんとはそこの男に代わりに返すよう頼んだあるけど、肝心の物を忘れていきやがったある」
「あ、すいません」
ああ、勇洙は一応理由があってここに来たのか（でも忘れ物以前に、来た時点でなんで来たのかも忘れてたんだろうな）。と、「それにしても、なんで半纏なんて借りたんですか？」と隣で勇洙が首を傾げた。そりゃそうだ。普通半纏なんて借りないし、ましてや借りたまま帰ったりすまい。
そんな勇洙に、耀兄はなぜかいらっとしたようだ。
「お前のせいでもあるあるよ」
「あるある…」
「？」
「お前やら梅鈴やら香やらが、朝っぱらから我を追い回すから…！」
その話によると、どうやらうちに来たあの日、耀兄はあの万博Tシャツを着て朝から庭で日課の太極拳をしていたらしい。そこへよれよれの万博Tシャツをどうにかしようと勇洙はじめ梅鈴ちゃんや香くんが、各々Tシャツを持ってきて、耀兄に着せようとした。ところがみんな自分のTシャツを着せたがり、こぞってこれを着ろいやこれだと大騒ぎになった中、耀兄は隙をついて逃亡。なんやかんやでうちに隠れに来たという訳ならしい。
「だってあの万博Tシャツはダメですよ」
「どこかダメあるか！」
「もうよれよれじゃないですか」
「そこがいいあるよ！」
なるほど。と、二人が言い合う隣で私は頷いた。とすると、この間梅鈴ちゃんが『Tシャツを持って行ったけど着てくれなかった』って言ってたのは、このことだったのかな（香くんは何も言ってなかったけど）。
「じゃ、我はそろそろ行くある。あと勇洙の声でかすぎで、桜の綺

麗な歌声が台無しだったあるよ」
「「蒸し返されたーっ」」
そこは最後までスルーしようよ！何一つつっこまずにもしかして無かったことにしてくれるのかと思わせたのはなんだったの！
去っていく後ろ姿に、本当はないとしても悪意を感じずにいられないのだった。とか考えてたら、「すきありっ」と勇洙の腕が私の胸元に伸びてきた。
「ちょっこらっ」
はたいた。耀兄に気付かれたりしたらえらい目に遭うくせに、このタイミングでやるってお前…。
あ、とそこで勇洙は声をあげた。
「オレ、半纏渡しにここに来たから、もう用はないんだぜ」
「そういえばそうだね」
あ、と今度は私が声をあげる。
「じゃあ帰る前に」
藁にもすがる思いで、聞いておきたいことがある。
「私今度制服をワンピース型のにしようと思うんだけど、どんなのがいいと思う？」
「桜はかわいいからなん…」
「どーん」
「わーっ！！！」
目潰ししてみた。
「何するんだぜ！」
怒られた（当たり前か）。
「どんなのがいいと思う？」
「…仕切り直しやがったんだぜ…はっはっはっ！そもそもワンピースなんか似合う訳ないんだぜ！！」
「どどーん」
「ひぃぃっ！！！」
また目潰しと見せかけて急所を蹴り上げてみた。

「あぃごぉぉお…ひどいんだぜ…」
ひどいのは君だよ勇洙。（彼の目から涙が流れている？いいえ、それはケフィアです）
「なんで誰もまともに答えてくれないかねえ…」
そんなこんなで、しばらくじゃれ合った後、勇洙は帰って行った。
今更ながら、一体私たちは何してたんだろうなんて思いながら、私はたまたまついていたテレビ番組に見入ったのだった。

＊＊＊

『お風呂空きましたよ』
『ねえ菊兄、今度ワンピース型の制服着ようと思うんだけど、どんなのがいいと思う？』
『桜はかわいいからなんでも似合いますよ』
『そりゃどうも。で、どんなのがいいかな？』
『…個人的にはか〇なぎみたいな制服が好きです』
（なんですかその薄い反応…）
（なるほど…わりとかっちりした感じね…）

よなが（後書き）

これまでの文章のパターンのオンパレードみたいな感じ。それもあって、しかも途中中国さんが乱入していて、あと最終話なので、ちょっと長くなりました。

余談ですが、家に誰もいない時にお風呂で熱唱している途中で、いつの間にか帰ってきた父に突然話しかけられて叫びかけたことがあります。あれは死ぬほど恥ずかしかった。

そんなこんなで、空気を読む桜ちゃんとアジアの人々の、だらだらぐだぐだなお話はおしまいです。ここまで読んでくださり、ありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2932z/

ひよりみ

2011年12月17日22時58分発行